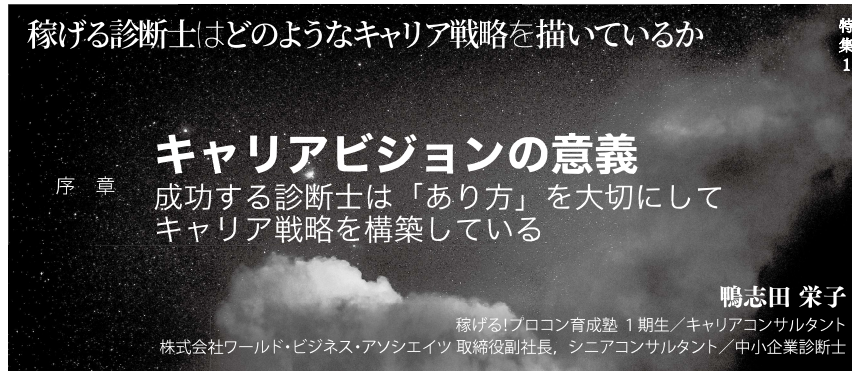




稼げる！プロコン育成塾（以下、稼プロ！）は、一般社団法人東京都中小企業診断士協会中央支部の認定マスターコースの一つで、2001年に開塾し、現在25期の運営を行っている。筆者は、11～20期まで塾長として講座カリキュラムの企画・運営を行ってきた。当塾は、「中小企業診断士として今後どうありたいか」というキャリアビジョンを重視している。

本章では、当塾が考えるキャリアデザインの方法について紹介する。そして第1～3章では、3名の卒業生の活躍とともに、それぞれのキャリア戦略について同塾講師陣が解説する。

1 キャリアとは

「キャリア」の英語表記はCareerで、フランス語の「キャリアエル」に由来する。「太陽が空を通り抜ける道筋」や「目的地に向かう航路」といった意味が込められている。

キャリアには、「外的キャリア」と「内的キャリア」がある。外的キャリアは第三者から見えるもので、自分が実際に歩んできたステップである。一方、内的キャリアとは、自分の内面にあるもの

であり、「このような人になりたい」、「このような仕事に就きたい」、「今後、このような人生を送りたい」といった“思い”が該当する。

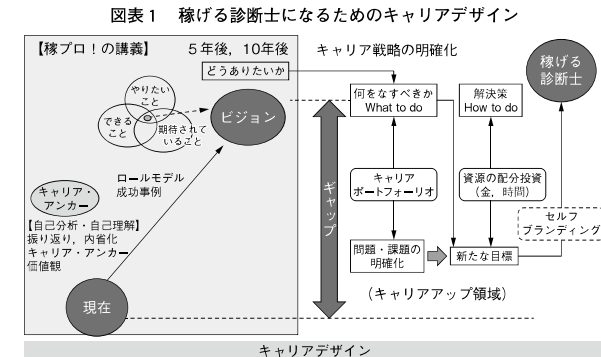
これまで歩んできた外的キャリアを振り返ることで、心理面での変化、価値観や意欲の変化などの内的キャリアも知ることができる。

2 稼プロ！におけるキャリアデザイン

「キャリアデザイン」とは、診断士としてのキャリアビジョンを実現するための活動やライフスタイルを、主体的に設計していくプロセスをいう。当塾が考える「稼げる診断士になるためのキャリアデザインの全体像」を図表1に示す。塾生は、キャリアビジョンを描くことから始め、1年かけて、それをブラッシュアップしていく。

(1) 自己分析を通じた内省化

毎年、講座の初日に内省化を目的として、自己分析を行うワークを実施している。具体的には、診断士登録までの人生を4つのフェーズに区切り、自分が歩んできた道を遡ることで外的キャリアを確認していく。



そのプロセスで、各フェーズで何に興味を持っていたのか、どのようなことに心を動かされていたのか、何を大切にしていたのか、どのような生き方をしていたのかなどの内的キャリアを文字化していく。このプロセスを踏むことで、人生における診断士登録という一つの通過点がどのような意味を持つのかを意識することができる。

(2) キャリア・アンカーの探索

「キャリア・アンカー」とは、キャリアを選択する際に、絶対に譲れない価値観や欲求をいう。アメリカの心理学者であるエドガー・シャインが提唱した理論であり、8種類のカテゴリーから成る（図表2）。

「診断士」というキャリアを、どのように生かしていきたいのか、今後の人生の選択にあたり自己イメージを固めるため、市販の冊子*を用いて、自分自身のキャリア・アンカーを探っていく。一人ひとりが独立を意識したきっかけや、年齢、家庭の事情などが異なるため、価値観も多様である。

このワークでは、今後の人生において、診断士として拠り所となる自分の軸を見つけていく。たとえば、「自分の裁量で仕事ができるようになる」、「これまで培ってきた専門性を生かせる仕事に就

く」、「家族との生活を中心として仕事とのバランスを大切にする」などである。

*Edgar H.Schein 著、金井壽宏・高橋潔訳「キャリア・アンカー I セルフ・アセスメント」（白桃書房、2009年）

図表2 キャリア・アンカーの8つのカテゴリー

分類	特徴
①専門・職能別コンピタンス	自分の技能を応用し、技能をつねに高いレベルに向上し続ける機会を求める（専門性の発揮）
②経営管理コンピタンス	組織の中で高い地位につき、部門を越えて人々の努力を統合し、担当組織の成果に責任を持つ機会を求める（ジェネラリスト指向）
③自律・独立	自分の仕事を自分なりに定義でき、なにより自由でいたい。キャリア上のことは自分のやり方、自分のペースを優先させる
④保障・安定	終身雇用制度、退職時の諸制度の充実などの安定した雇用環境にある仕事を求める
⑤起業家的創造性	リスクテイクして障害を乗り越えていく、自分の意欲と自己の能力だけに頼って組織や企業を創造する機会を求める
⑥奉仕・社会貢献	世界をよりよくする、環境問題を解決する、誰かを助ける等の自分の中心にある価値観を実現できる仕事をする機会を求める
⑦純粋挑戦	解決不可能と思われる問題を解決すること、強敵に打ち勝つこと、困難な障害を乗り越えることなどに取り組む機会を求める
⑧生活様式	自分個人のニーズ、家族のニーズ、キャリアからの要請にバランスをとり、それらを統合できることを求める

出所：Edgar H.Schein 著、金井壽宏・高橋潔訳「キャリア・アンカー I セルフ・アセスメント」（白桃書房、2009年）をもとに筆者作成